

[調査資料]

小学生の基本的な生活態度が不安・ストレス反応, 学力に与える影響
—生活態度への指導は児童のQOLに影響を与えうるのか—

遠山 孝司¹⁾, 早川 智洋²⁾, 澄田 俊治³⁾, 佐伯 光子²⁾,
井岡 弘道²⁾, 浅田 匡⁴⁾

キーワード：小学生, 生活態度, 指導, 不安・ストレス反応, 学力

Relationships between Modus Vivendi, Stress Responses, and Scholastic
attainments in Grade School:

Does Guidance to the Modus Vivendi Influence Children's QOL?

Takashi Tohyama¹⁾, Tomohiro Hayakawa²⁾, Shunji Sumita³⁾, Mitsuko Saeki²⁾,
Hiromichi Ioka²⁾, Tadashi Asada⁴⁾

Abstract

The purpose of this study was to investigate about the influence of modus vivendi on stress responses and scholastic attainments. 586 grade school students were asked by questionnaire. The first graders and the second graders were answered about modus vivendi. Third, fourth, fifth, and sixth graders did about modus vivendi and stress responses. Scholastic attainments of fourth graders were used for analysis. The following results were obtained: modus vivendi consists of three sub concepts; regular life, tooth brushing and facial cleansing, and guidance before going out. Stress responses consist of two sub concepts; low concentration and aggression. Differences in grades and sex were partially confirmed. The relations between the modus vivendi, stress responses, and scholastic attainments were partially shown. In conclusion, the guidance of the modus vivendi to the grade school student might decrease stress responses and improve scholastic attainments.

Keyword : Grade School Student, Modus Vivendi, Guidance, Stress Responses, Scholastic
Attainments

-
- 1) 新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科
 - 2) 西宮市立鳴尾東小学校
 - 3) 西宮市教育委員会
 - 4) 早稲田大学 人間科学学術院

[連絡先] 遠山 孝司
〒950-3198 新潟市北区島見町1398
TEL・FAX : 025-257-4530
E-mail : tohyama@nuhw.ac.jp

要旨

本研究は586名の小学生を対象とした調査から、生活態度と不安・ストレス反応、学力の実態を把握し、これらの関連から、生活態度への指導が不安・ストレス反応と学力に与える影響を検討することを目的としたものである。分析の結果、生活態度は生活リズム、歯磨き・洗顔、家を出る前の指導という3つの下位概念からなっていること、不安・ストレス反応は集中力の低さ、攻撃性という2つの下位概念からなっていることが明らかにされた。生活態度と不安・ストレス反応については部分的に学年差と性差が確認された。生活態度と不安・ストレス反応、学力の関連より、小学生への生活態度の指導が不安・ストレス反応を低減し、学力を高める可能性が示唆された。

I 問題と目的

かつて、基本的な生活態度を身につけることはそれ自体が好ましいものとされていた。「早起きは三文の得」(だから早寝早起きをするべきだ)ということわざや、「(食べ物を粗末にすると)もったいないお化けが出る」(から食べ物は好き嫌いせずに残さず食べなさい)などの説話をういた教育、啓発がなされ、基本的な生活態度は日常生活の中で自然に身につけられるべきものとされていた。しかし、個性重視の教育が主張された1990年代後半にはそのようなことわざ、説話が大人から子どもに伝えられることも少なくなり、親の子どもに対する期待は基本的な生活態度よりも学力を身につけることが重視される傾向にあった。

現在、子どもに対する教育、中でも小学生に対する教育では、その指導内容について、学業的な知識だけではなく基本的な生活態度を身につけさせることが求められている。2008年に改訂された小学校学習指導要領¹⁾では学校教育の目標として「(特に低学年では)基本的な生活習慣や善悪の判断、社会生活上のルールを身に付けること」とされている。さらに家庭教育については教育基本法第10条において「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」としている。これらは学校と家庭のどちらにおいても児童に基本的な生活態度を身につけさせるための指導が必要であることを示すものである。そして基本的な生活態度を身につけ、心身の調和をはかることは、児童の現在および将来のQOL (Quality of Life) を高めることにつながると考えられる。

そのような中、保育所関係者(教育関係者)と子どもを保育所に通わせている保護者を対象とした調査²⁾で、

子どもの基本的な生活習慣と社会的な生活態度についての意識が保護者と教育関係者の間で大きく異なることが明らかにされている。たとえば、学校では朝食を食べることを勧めても、家庭で準備がされないというケースや、学校では早寝早起きを推奨しても、児童は夜遅くまで親の外出につきあい就寝が遅くなるケースなど、小学校でも学校と保護者の間で基本的な生活態度に対する考え方が異なるために、学校での指導と家庭での指導が矛盾することが時として起こりうる。そのような中、小学校で児童に生活指導を行う際に学校で児童に直接働きかけたり、保護者に好ましい生活態度を紹介するだけでなく、児童の保護者に対して、基本的な生活態度を身につけることのメリットを紹介し、保護者から児童に対する家庭での生活指導と学校での指導の連携、協調を目指す動きがある。このような流れの根底には、いくつかの研究³⁻⁴⁾において指摘されているように、保護者の生活態度、中でも好ましくない生活態度と子どもの生活態度が強く関連していることや、親の養育態度と子どもの基本的な生活態度が関連していることなど、児童の生活態度については、家庭生活の影響が強く、小学校の指導がおよばない部分があるという問題がある。

以上のように、学校と保護者が協力して児童の生活態度の指導するために、まず基本的な生活態度を身につけることのメリットを明らかにする必要がある。そしてこれまでに女子大学生については生活態度と学習習慣、学習態度の間に関連があることが示されている⁵⁻⁶⁾。しかし、学習指導要領や教育基本法の中で基本的な生活態度を身につけさせることがすでに求められている小学生を対象に基本的な生活態度を身につける意義の検証は長い間なされてこなかった。文部科学省は1981～1983年度と1993～1995年度に教育課程実施状況調査を行い、国立教育政策研究所は学業面における学習指導要領の達成度、学業に対する意識や家庭での学習状況、基本的な生活習慣などに関する実態を明らかにしているが、生活態度と学業の関連の分析およびその結果の公表はなされていない⁷⁻⁸⁾。そして、国立教育政策研究所は2007年度～2009年度に行われた全国学力・学習状況調査のデータを分析する中でようやく朝食を食べる、学校へ行く前に持ち物を確認する、家の人と学校での出来事について話をする等の傾向を持つ小学校、中学校の児童生徒はそうでない児童生徒に比べて、国語や算数、数学で正答率が高い傾向にあることを示し、基本的な生活習慣を身につけることの意義を実証した⁹⁻¹¹⁾。これらは、基本的な生活習慣を身につけていることが、学力に結びついている可能性を示したものである。しかし、全国学力・学習状況調査の調査結果⁹⁻¹¹⁾では、小学生の生活態度と学力の関連を学年別の特徴を扱っておらず、生活態度と不安・ストレス

反応などの心理的な問題の関連についても扱っていない。また、基本的な生活習慣の中でお互いに関連が強いと思われるさまざまな生活習慣のうちのどれが、不安・ストレス反応や学力に最も影響しているのかを検討していない。

そこで本研究は小学生を対象にした調査によって集められたデータから小学生の生活態度、不安・ストレス反応などの実態を把握した上で、生活態度のさまざまな下位概念と心理的な問題、学力などの関連について検討し、生活態度についての家庭での指導を保護者に要請する際の基礎資料を得ることを目的とする。生活態度が児童の不安・ストレス反応、学力と関連していることが示されるのであれば、小学生に対して生活態度の指導をすることが児童のQOLを高めると考えられるため、児童の保護者に対し、生活態度についての家庭での働きかけの重要性を示す際の論拠となり得るであろう。また、学年ごとの特徴を明示することができれば、児童の発達に対応する親の生活態度への指導を提案できると考える。さらに、比較的内的一貫性が高いと思われる様々な生活習慣のうち、どれが不安・ストレス反応や学力に結びついているのかについても、探索的に検討する。

II 方法

調査協力者 H県N小学校の1年生から6年生までの児童586名(女子302名、男子284名)の協力を得た。調査協力者の内訳は1年生98名(女子47名、男子51名)、2年生100名(女子55名、男子45名)、3年生93名(女子47名、男子46名)、4年生107名(女子53名、男子54名)、5年生93名(女子52名、男子41名)、6年生95名(女子48名、男子47名)であった。

調査時期 2007年6月に校内で「生活についてのアンケート」という質問紙を用いた調査が行われた。

調査内容 「生活についてのアンケート」は1、2年生と3、4、5、6年生で異なるものが用いられた。1、2年生に対しては「これは、いつもの生活をふりかえることで、どんなことに気をつけたらよいのかをかんがえ、これからの生活をよりよくしていくためのものです。あてはまるものに、○をつけてください。」という指示で「あなたは、よるふとんにはいると、すぐにねむれますか」「あなたは、あさ、きもちよくおきることができますか」などの生活態度に関する10項目に対し「はい」「ときどき」「いいえ」の3件法で評定することを求める質問紙を用いた。3～6年生に対しては1、2年生に回答を求めた生活態度についての評定に加えて「さいきんのあなたのことをおしえてください。つぎのしつものに、「はい」か「いいえ」でこたえてください」という指示で「すぐにちよっかいをだしたり、けんかをしたりし

てしまう」「このごろ、ながいあいだかんがえるのが、むずかしい」などの不安・ストレス反応に関する7項目に対し「はい」「いいえ」の2件法での評定を求める項目群を含んだ質問紙を用いた。これらの質問項目は筆者のうち経験年数10年以上の小学校教員3名によって、その内容が提案、作成されたものである。生活態度に関しては小学1年生から6年生が、不安・ストレス反応に関しては小学3年生から6年生がそれぞれ無理なく答えられる平易な表現とし項目数を減らすこと、選択において迷うことがないように、選択肢の数を減らすことに特に配慮がなされた。なお、4年生に関しては補足的に生活態度と不安・ストレス反応、学力の関連を検討するために、国語、社会、算数のそれぞれに関する学力がN小学校のあるN市で全市の4年生を対象に行われた一斉学力テスト(業者テスト)の結果から100点満点のデータとして収集された。

調査手続き 各クラスの授業時間を利用して質問紙を配布し、一つ一つの項目を担当教師が読み上げるのを聞きながら調査協力者である児童が評定する形式で調査が行われた。

倫理的配慮 調査に先立ち、どうしても答えたくない項目については答えなくてもよいという説明が教員より児童に対して口頭でなされた。事前に調査の内容についての詳しい情報を保護者に説明することで児童からの回答に影響が現れることを懸念し、保護者への調査内容と結果についての説明は調査終了後行われた。分析結果は児童および保護者にフィードバックされ、その後結果を公開することに対する承認が得られた。なお、この研究結果の公開は新潟医療福祉大学の倫理委員会に承認を得たものである。

III 結果

1 生活態度尺度に対する評定の得点化

生活態度についての評定は「はい」を2点、「ときどき」を1点、「いいえ」を0点とし、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子固有値の減衰量および因子の解釈可能性から3因子と判断した。説明率は45.82%であった。パターン行列および因子間相関を表1に示す。

第1因子は「朝、気持ちよく起きることができますか」「夜布団に入るとすぐに眠れますか」などの3項目からなり、それらの項目内容から「生活リズム」因子と命名された。第2因子は「朝と夜歯をみがいていますか」「朝、顔を洗ってきますか」という2項目からなり、項目内容から「歯磨き・洗顔」因子と命名された。第3因子は「ハンカチ、ティッシュを持ってきていますか」「おはよう」「さようなら」「ありがとう」「ごめんさ

表1 生活態度の因子分析の結果（主因子法、プロマックス回転）

項目内容	生活リズム	歯磨き・洗顔	家を出る前の指導
生活リズム			
朝、気持ちよく起きることができますか	.54	.17	-.08
夜布団に入るとすぐに眠れますか	.48	.01	-.06
毎日、うんこがでますか	.46	-.02	.00
歯磨き・洗顔			
朝と夜歯をみがいていますか	.04	.56	-.03
朝、顔を洗ってきますか	-.04	.53	.14
家を出る前の指導			
ハンカチ、ティッシュを持っていますか	-.07	.07	.45
「おはよう」「さようなら」「ありがとう」「ごめんなさい」などが言えますか	.28	-.07	.33
朝ごはんを食べてきますか	-.05	.20	.32
残余項目			
天気が良い日は外で遊びますか	.29	-.11	.14
つめを短く切っていますか	.21	-.03	.27
因子間相関	生活リズム	歯磨き・洗顔	家を出る前の指導
	生活リズム (.49)		
	歯磨き・洗顔 .34	(.49)	
	家を出る前の指導 .46	.44	(.35)

() 内は尺度の α 係数

表2 不安・ストレス反応の因子分析の結果（主因子法、プロマックス回転）

	集中力の低さ	攻撃性
集中力の低さ		
頑張ってしまうという気持ちがなくなることがある	.74	-.08
勉強時間にほかのことばかり考えてしまう	.55	.02
このごろ長い間考えるのが難しい	.52	.09
攻撃性		
すぐに腹が立つ	.00	.83
すぐにちょっかいを出したりけんかをしたりしてしまう	.03	.44
残余項目		
時々、大声で叫びたくなる	.27	.18
すぐにしんどくなる	.24	.18
因子間相関	集中力の低さ	攻撃性
	集中力の低さ (.63)	
	攻撃性 .51	(.56)

() 内は尺度の α 係数

い」などが言えますか」などの3項目からなり、抽象度の違いはあるが家を出る前に家庭内で親が注意して指導しないと身につかない習慣を指す項目内容から「家を出る前の指導」因子と命名された。複数の因子に対して、.30以上の因子負荷量を示す項目が見られなかったため、各因子に対して、.30以上の負荷量を示した項目(第1因子3

項目、第2因子2項目、第3因子3項目)により各下位尺度を構成することとした。下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、.35~.49という尺度の内的一貫性を示すには十分に高いとはいえない係数が得られた。これは3件法での評定で回答が集中したことも一因と考えられる。個人ごとに各下位尺度項目の評定値の平均値を算出

し、それらを各下位尺度得点とした。各下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出したところ、歯磨き・洗顔得点や家を出る前の指導得点の多くで天井効果の傾向が確認された。

2 不安・ストレス反応尺度に対する評定の得点化

不安・ストレス反応についての評定は「はい」を1点、「いいえ」を0点とし、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子固有値の減衰量および因子の解釈可能性から2因子と判断した。説明率は49.60%であった。パターン行列および因子間相関を表2に示す。

第1因子は「がんばってしようという気持ちがなくなることがある」「勉強時間にほかのことばかり考えてしまう」などの5項目からなり、それらの項目内容から「集中力の低さ」因子と命名された。第2因子は「すぐに腹が立つ」「すぐにちょっかいを出したりけんかをしたりしてしまう」という2項目からなり、項目内容から「攻撃性」因子と命名された。複数の因子に対して.30以上の因子負荷量を示す項目が見られなかったため、各因子に対して.30以上の負荷量を示した項目（第1因子3項目、第2因子2項目）により各下位尺度を構成することとした。下位尺度ごとに α 係数を算出したところ.56～.63という尺度の内的一貫性を示すには十分に高いとはいえない係数が得られた。これは2件法での評定で回答が集中したことが理由として考えられる。個人ごとに各下位尺度項目の評定値の平均値を算出し、それらを各下位尺度得点とした。各下位尺度の平均値と標準偏差を算出したところ、天井効果および床効果は認められないことが確認された。

3 学業成績の概要

4年生の国語、社会、算数の成績は、教科間の成績の関連も高く(.71～.82)、因子分析の結果1因子性が高いことが示された。また尺度の信頼性係数からも一つの概念を測った尺度としての内的一貫性は十分に高いと言える($\alpha = .90$)。そこで、3つの教科の得点の平均値を学力得点とし、以後の分析を行った。学力得点の平均値と標準偏差を算出したところ、天井効果および床効果は認められないことが確認された。

4 各尺度得点の学年と性別による差

生活態度、不安・ストレス反応、学力の実態を把握するために、生活態度の下位尺度得点である生活リズム得点、歯磨き・洗顔得点、家を出る前の指導得点、不安・ストレス反応の下位尺度得点である集中力の低さ得点、攻撃性得点について、学年と性別を被験者間要因とする2要因の分散分析および有意な結果については下位検定を行った。学力得点については4年生についてのみデータが得られたため性別による t 検定を行った。

生活リズム得点については学年による主効果($F(5,574) = 3.50, p < .01$)が有意であった。しかし、性別による主効果($F(1,574) = 0.74, n. s.$)と学年と性別の交互作用($F(5,574) = 1.04, n. s.$)はそれぞれ有意ではなかった。学年の主効果についてはTukeyの多重比較を行い、1年生(平均1.22)は5年生(平均1.42)よりも5%水準で有意に得点が低いことが明らかにされた。

歯磨き・洗顔得点については性別による主効果($F(1,574) = 46.15, p < .01$)が有意であった。しかし、学年による主効果($F(5,574) = 0.95, n. s.$)と学年と性別の交互作用($F(5,574) = 2.07, n. s.$)はそれぞれ有意ではなかった。歯磨き・洗顔得点は女子(平均1.72)の方が男子(平均1.46)よりも高いと言える。

家を出る前の指導得点については学年による主効果($F(5,574) = 8.66, p < .01$)と性別による主効果($F(1,574) = 16.16, p < .01$)がそれぞれ有意であった。しかし、学年と性別の交互作用($F(5,574) = 1.34, n. s.$)は有意ではなかった。家を出る前の指導得点は女子(平均1.67)の方が男子(平均1.55)よりも高いと言える。学年の主効果についてはTukeyの多重比較を行い、1年生(平均1.68)は6年生(平均1.46)よりも得点が高く、2年生(平均1.75)は3年生(平均1.57)や5年生(平均1.56)、6年生よりも得点が高く、4年生(平均1.65)は6年生よりも得点が高い、つまり6年生は1年生だけでなく、2年生、4年生よりも得点が低いことが明らかにされた。

集中力の低さ得点については性別による主効果($F(1,380) = 12.75, p < .01$)が有意であった。しかし、学年による主効果($F(3,380) = 1.53, n. s.$)と学年と性別の交互作用($F(5,574) = 0.56, n. s.$)はそれぞれ有意ではなかった。集中力は学年にかかわらず男子(平均0.37)の方が女子(平均0.25)より低いと考えられる。

攻撃性得点については学年による主効果($F(3,380) = 2.72, p < .05$)が有意であった。しかし、性別による主効果($F(1,380) = 0.72, n. s.$)と学年と性別の交互作用($F(5,574) = 0.70, n. s.$)はそれぞれ有意ではなかった。学年の主効果についてはTukeyの多重比較を行い、4年生(平均0.26)は5年生(平均0.41)よりも攻撃性得点が低いことが明らかにされた。

4年生の学力得点について、性別による差を検定するために、まず分散の有意差検定を行った結果、男女で分散の等質性が認められなかったため($F(51,53) = 4.38, p < .05$)、ウェルチの t 検定を行った。その結果、男女の学力得点に有意な差は認められなかった($t(100.66) = 0.75, n. s.$)。

5 生活態度と不安・ストレス反応、学力との関連

生活態度の下位尺度、不安・ストレス反応の下位尺度の各尺度得点および学力得点について相関係数を算出した結果、重回帰分析における多重共線性による分析の過誤が生じない程度に各尺度得点は独立していることが確認された。そこで、生活態度の下位尺度得点である生活リズム得点、歯磨き・洗顔得点、家を出る前の指導得点を予測変数、不安・ストレス反応の下位尺度得点である集中力の低さ得点、攻撃性得点、学力得点を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行い、児童の生活態度が不安やストレス、学力に影響を与える可能性を検討した。

集中力の低さ得点を目的変数とした重回帰分析の結果、生活リズム得点 ($\beta = -.30, p < .01$) と家を出る前の指導得点 ($\beta = -.25, p < .01$) が有意な標準偏回帰係数をもつ説明変数となった。歯磨き・洗顔得点は除外された。このときの全体の自由度調整済み決定係数 R^2 は.18であり、1%水準で有意であった ($F(2,385) = 44.02, p < .01$)。生活リズムの良好さと家庭での保護者の積極的な指導が集中力を高めると考えられる。

攻撃性得点を目的変数とした重回帰分析の結果、家を出る前の指導得点 ($\beta = -.14, p < .01$) と生活リズム得点 ($\beta = -.13, p < .05$) が有意な標準偏回帰係数をもつ説明変数となった。歯磨き・洗顔得点は除外された。このときの全体の自由度調整済み決定係数 R^2 は.04であり、1%水準で有意であった ($F(2,385) = 8.62, p < .01$)。家庭での保護者の積極的な生活指導と生活リズムの良好さが攻撃性を低減させていると考えられる。

学力得点を目的変数とした重回帰分析の結果、家を出る前の指導得点 ($\beta = .24, p < .05$) が有意な標準偏回帰係数をもつ説明変数となった。生活リズム得点と歯磨き・洗顔得点は除外された。このときの全体の自由度調整済み決定係数 R^2 は.05であり、5%水準で有意であった ($F(1,104) = 6.47, p < .05$)。家庭での保護者の積極的な指導が学力を向上させていると考えられる。

IV 考察

本研究は小学生を対象とした質問紙調査から児童の生活態度、不安・ストレス反応、学力の実態を把握した上で、それらの関連を検討して児童の生活態度が不安・ストレス反応や学力に与える影響を明らかにした。これは児童の生活態度に対する指導の必要性の根拠を明らかにすることと、児童の不安やストレスの解消や、学力の向上に関連する生活態度への指導のあり方をさぐることを目的とするものであった。

児童の生活態度、不安・ストレス反応については、それらが複数の下位概念から成り立っていることが明らか

にされた。生活態度の下位概念は生活リズム、歯磨き・洗顔、家を出る前の指導であった。不安・ストレス反応の下位概念は集中力の低さ、攻撃性であった。それらの下位概念および学力の尺度得点について以下のような学年差および性差が確認された。

生活態度の下位概念である生活リズムは1年生が5年生に比べて良好であった。家を出る前の指導に対して男子が女子と比較して比較的自由な状態であること、6年生が1、2、4年生と比べてそれほど意識していないこと、2年生は6年生だけでなく3年生や5年生に比べても強く意識していることが明らかにされた。歯磨き・洗顔に学年差は見られなかった。不安・ストレス反応の下位概念である集中力について学年差は見られなかった。攻撃性は5年生が4年生に比べて高かった。

これらの学年差に関わる結果から学年差をそのまま発達の傾向であると解釈することの危険性は考えられる。しかし、そのように解釈した場合には、1年生から5年生の間に生活リズムの乱れが生じる、2年生は家を出る前の指導を強く意識しているが、その後3年生と5年生でいったん2年生の頃に比べるとあまり意識しない状態へ変化する、6年生で他の多くの学年と比べて家を出る前の指導をあまり意識していない状態へ変化するなどの解釈が考えられる。また、攻撃性は4年生から5年生になる間に高まると考えられる。この背景として、保護者の児童に対する生活態度への指導が2年生で一定の効果をもたせ、学年が上がるにつれ保護者はもう指導しなくてもよいだろうと考えるようになり、その結果、児童の家を出る前の指導に対する意識が低くなっているという可能性が考えられる。

性差としては、生活態度の中でも歯磨き・洗顔や家を出る前の指導、不安・ストレス反応の一つである集中力については女子の方が男子に比べて良好であると言える。これらの結果は、女子の方が歯磨き・洗顔を整えることを意識する傾向が強い、家を出る前の指導は男子よりも女子の方が徹底されやすい、男子は女子に比べて集中力に欠ける傾向がある児童の数が多いなどという一般的な傾向と整合的であり、本研究で用いられた生活態度および不安・ストレス反応の尺度の妥当性を支持するものである。

生活態度と不安・ストレス反応、学力の関連として、生活態度が良好であることと不安・ストレス反応が少ないこと、学力が高いことが部分的に関連していることが示された。不安・ストレス反応と学力の間の関連として集中力のなさや学力の間に関連が見られたことについては、学習にあたって集中することの重要性を示すものであり、生活態度への指導だけでなく、学習時の指導として集中することを徹底するべきであることが今回示され

たと言える。

さらに生活態度への指導が不安・ストレス反応を低減させ、学力を高める可能性について検討したところ、生活リズムの良好さと保護者の積極的な指導が集中力を高め、攻撃性を低減させる、保護者の積極的な指導が学力を向上させるなどの可能性が様々な学年で示唆された。児童の保護者に対して、児童の生活態度を改善させることが不安・ストレス反応を低減し、学力を高める可能性が示されたことは、今後の学校と保護者の生活態度指導における連携の際の論拠となるであろう。また、先行研究³⁾では、中学生の生活習慣・食習慣・運動習慣が保護者の影響を受けていることを示している。これらの知見から、家族そろって好ましい生活態度で生活すること、児童の適応は関連しているようである。

本研究の限界として、まず、尺度の妥当性が生活態度尺度と不安・ストレス反応尺度において十分に確認されていないことがあげられる。今回用いた尺度はベテラン教員が列挙した項目に対して、探索的に因子分析を行い、尺度の信頼性を求めることで妥当性を高める努力がなされた。そして分析の結果、一部の尺度の内の一貫性が十分高いとは言えないこと、天井効果が確認されたことなどの問題が明らかにされた。これについては児童の負担も考慮した上で項目数を増やす、選択肢を増やすなどの尺度の構成についても今後改良を検討する必要があるであろう。また、不安ストレス得点は3～6年生のみ、学力得点は4年生のみのデータを用いて分析したため、生活態度と不安・ストレスの関連については3～6年生についての結果から、生活態度と学力の関連、不安・ストレスと学力の関連については4年生のみについての結果からそれぞれ論じており、本研究で得られた知見の一般性については小学校の他の学年のデータを用いた研究や中学生や高校生を対象とした調査を今後行い検討していく必要がある。

また、本研究は生活態度と不安・ストレス反応、学力の関連について、生活態度が変化することで不安・ストレス反応や学力が連動して変化するという方向性でのみ解釈している点にも議論の余地が残る。集中力のなさや攻撃性、学力などから来る不適応感が生活態度をより良好でないものにする可能性も考えられる。そのため、本研究の結果をもって生活態度をよいものにすれば、すべからず不安やストレスを低減でき、学力を上昇させると断言することは出来ない。親の知能の高さや社会経済的地位、親自身の持つ不安やストレス、家庭環境など、本研究で扱わなかった多くの要素が児童の生活態度や不安・ストレス反応、学力に関連する可能性などから「親が児童にとってのよい生活態度を意識し、指導することで、不安・ストレス反応が低減され、学力が上がる可能

性がある」という解釈が妥当であろう。

さらに本研究で示された学年差が発達段階における特徴であるのか、各学年の特色が示されたものなのかが明確でないという問題がある。調査協力校の教員からは学年差に関わる分析結果について「学年カラーが如実に表れている」「2年生は、もともと落ち着いた子が多いからなのか、保護者や家庭環境の問題なのかそれまでの担任による指導の問題なのかはわからないが、よく1年生や3年生と比較されて落ち着いていると言われていた」「6年生は生活習慣の崩れた子が増えていた」などの感想が得られた。本研究で得られた知見が学年カラーなのか発達傾向なのかを明らかにするためには、同校児童だけでなく他校児童を調査協力者とした調査研究をさらに進め、本研究の知見の一般性を確認する必要があるであろう。

児童の生活態度は個人の裁量や家庭の教育方針にゆだねられているものであり、個人、または家庭内の問題に対して学校が関与するべきでないという主張が時としてなされることもある。これに対して、児童の生活態度の改善が不安・ストレス反応の低減、学力の向上につながる可能性を示す本研究の結果は一つの示唆を与えるものである。学校教育の目標が知識や教養、情操、道徳心、健やかな身体を育てることであるからというだけでなく、児童の不安やストレスが低減されるという意味においても、児童のQOLの向上を目指して、基本的な生活態度を身につけるための教育、指導において、家庭と小学校が連携し進めることは価値があると思われる。

文献

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領—平成20年3月—，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/syo.pdf, 2008年9月17日。
- 2) 長谷範子：「生きる力の基礎」の形成に関する一考察：保護者指導についての意識調査を通して，四天王寺国際仏教大学紀要，42：129-136，2006。
- 3) 渡部かなえ：子どもの健康状態と生活習慣に保護者の生活態度が与える影響，信州大学教育学部紀要，117：219-223，2006。
- 4) 田中宏子・田代佑子・貴田康乃：親の養育態度と子どもの基本的な生活態度の習得度，家政学研究，46：70-77，2000。
- 5) 宮本邦雄：女子大学学生における学習習慣と学生生活態度との関連，日本教育心理学会総会発表論文集，37：171，1995。
- 6) 宮本邦雄：女子大学学生における学習習慣・学習態度に関する研究（その2）：学生生活態度との関連，東海女子大学紀要，15：245-251，1995。

- 7) 国立教育政策研究所教育課程研究センター：平成14年度教育課程実施状況調査（高等学校）ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果，
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h14/H14_h/result.pdf，2009年12月3日。
- 8) 国立教育政策研究所教育課程研究センター：平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査結果の概要，
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/04/05042302/001.pdf，2009年12月3日。
- 9) 国立教育政策研究所：平成19年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント，
http://www.nier.go.jp/tyousakekka/tyousakekka_point.pdf，2009年12月3日。
- 10) 国立教育政策研究所：平成20年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント，
http://www.nier.go.jp/08chousakekka/01chousakekka_point.pdf，2009年12月3日。
- 11) 国立教育政策研究所：平成21年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント，
http://www.nier.go.jp/09chousakekka/01chousakekka_point.pdf，2009年12月3日。